

付録：兵庫県南部地震被害の実況放送

佃 為成

地震計観測がとらえた震源の位置とマグニチュードだけの第1報からは、6千人以上の犠牲者が出るほどの大震災の予想はできなかった。震度7の地域があったことは後で判明したことである。筆者は地震当日、テレビ局のスタジオにおいて、番組のコメンテータとして震災の情報が刻々入ってくる生の情報に接した。その経験をもとに震災の状況がどのようにして明らかになっていったのかを振り返ってみようと思う。

テレビのニュースで速報

1995年1月17日の朝6時45分ごろであった。「午前5時46分ごろ、淡路島北部で地震が発生しました。神戸、洲本で震度6、京都、豊岡、彦根で震度5、大阪、和歌山、姫路、徳島で震度4。地震の規模を示すマグニチュードは7.2と推定されています」

震源地が淡路島付近であること、テレビ局の窓から映し出される神戸市街の映像には、ふだんのような装いの近代的なビル群と何事もなかったかのように何台もの車が整然と走り抜けて行く光景が映し出されていた。あとから深刻な災害の様子が明らかになっていくのだが、そのときは、まだ被害のニュースは伝わって来なかった。

マグニチュード7を越す大地震である。これは尋常なことではない。関西地区で発生した。しかも淡路島だ。ここには活断層がいくつかあることは知っていたが、何々断層と聞いて覚えているほどの有名な断層はない。発生時刻から一時間以上も経っているのに被害の状況がさっぱり分からない。

被害のニュースがないのは不思議なことだった。マグニチュード7.8という今度の地震よりずっと規模が大きい1993年7月12日の北海道南西沖地震の時も、発生が深夜であったが直後の報道では北海道沿岸の津波は小さく、大きな被害はないような印象があった。あの大津波と大火のダブルパンチのすさまじい震災のことは翌朝になって知らされる。この場合は、北海道の本島から離れた小さな孤島といてよい地理的条件がなせる仕業であろうから、報道の遅れはある程度仕方がないと思ったが、今回の地震は、淡路島は四国と架橋で陸続きであり、近くの神戸市は大都市である。情報がすぐ入ってきてよいのではないかと思った。

被害はそんなに出ていないのではないかなと錯覚しそうであった。しかし、どこかである程度の被害は出るだろうと予想した。近代的な建築や土木構造物は持ちこたえたのだろうか。淡路島の震源地付近は大丈夫だったのだろうか。

この地震の規模（マグニチュード）が1943（昭和18）年9月10日の鳥取地震

と同じであることはすぐ思い浮かんだ。鹿野温泉付近や吉岡温泉付近に断層が出現し、鳥取市の市街地の建物は壊滅的な被害を受け、1,083 人の犠牲者が出た地震である。

地震のデータを視る

出勤途中の電車の中で、研究所に着いたらまず何をしようか考える。余震がどのように発生しているかを視よう。気象庁からの速報の FAX が届いているかもしれない。京都大学は地元だからその地震観測網のデータが一番信頼できるはずであるが、すぐそのデータが見られるか分からない。

私の勤める地震研究所には和歌山に地震観測所があり、阪神地区から少し離れているが和歌山の観測網で観測されたデータがコンピューターネットワークで伝送されている。余震がどの辺りで発生しているかを大雑把につかむのにはこちらの方が速いかもしれない。

この地震に対してどのように取り組むべきか。地震研究所の総力を挙げて観測や調査を行うべきであるが、今、日本列島は関東も東海地方も中部地方もいつ大きな地震に見舞われるか分からない。その備えもしておかねばならない。いろいろ考えることは多い。去年の同じ頃、確かアメリカのロサンゼルス郊外ノースリッジで地震があったっけ、と記憶をひも解いてみる。研究室に着いて、文献を広げると、ノースリッジ地震は今回の地震と同じ日（17 日）の、しかも現地時間で同じ早朝（4 時 30 分）に発生していたのである。

東京都文京区弥生にある地震研究所の中は、ざわついていて、地震地殻変動観測センターのテレビも付けっぱなしになっている。番組は地震一色のような模様である。被害の様子が伝わってきた。はっきりしないが百人ぐらいの犠牲者が出そうな模様である。神戸市などの被害が大きいらしい。これはただ事ではない。地震の震源は神戸にも広がっているのか。

ノースリッジ地震では、高速道路の橋桁が落ち、ビルの窓ガラスが多数割れ、家屋の被害も多かった。死者は 51 人と記録されている。この地震のマグニチュードは 6.6 だった。今度の地震は、マグニチュードが 0.6 も上まわっている。これは、地震波のエネルギーでいうと 7～8 倍も大きいことになる。ノースリッジ地震と同じ早朝という発生時刻であるが、規模が大きくなると被害はもっと増えるかもしれない。犠牲者の数も倍ぐらいにはなるかもしれない。これは大変だ。

和歌山観測所の余震の震源分布は、淡路島北部から神戸市街地を縦断して西宮市周辺地域に至る線上に細い带状に広がっている。地下の地震断層が 50km 以上に伸びているように見える。これは、神戸市を中心とする都市直下大地震ではないか。

震源域は一部明石海峡を占めるが、大部分は陸地の直下である。海岸沿いの陸地で発生した鳥取地震との類似性はますます高まった。内陸地震の典型のひとつであろう。何をどのように調査すればよいのか。地震研究所からも次々に現地に

調査や観測に出かけることになるだろう。その日、地震予知研究推進センターでは、地震研究所内部はもとより全国の大学、その他の研究機関との連絡、情報の交換に当たる態勢が整えられた。

その日のうちに地震断層が地表に出現していないかを見つける目的の調査班や人工衛星を用いた測量調査（GPS）を行うグループなどが現地へ向けて出発した。

テレビにコメンテーターとして出演

地震研究所の教員の中には報道関係の対応に追われる人たちがいた。私もいくつかの新聞社などの取材の電話に出たし、午後からは報道テレビ番組のコメンテーターとして出演することになった。さらに深夜から早朝までのロングランの報道特別番組出演も引き受けてしまった。

地震発生当初のテレビ局内で次々に入ってくる生のニュースとともに味わった数々の衝撃が、私たちに震災の深刻さを認識させていったのであった。

12時30分に某テレビ局に入った。13時頃、スタジオにはすでに建築関係の専門家（防災都市計画研究所のY氏）が席に着いていた。その方と男性アナウンサー（K氏）の間に座り番組の開始を待つ。コマーシャルの後、女性アナウンサーがニュースの原稿を読む。兵庫県警の調べによると13時15分現在、死者337人、行方不明580人、負傷者1105人。

被害状況はまだ断片的だ。京都太秦の広隆寺の立像三体が倒れた。神戸製鋼の大きなクレーンが使えない状態になった。現場からの映像とレポートも入る。現地記者や地元関係者へ問いかけるアナウンサーK氏のタイミングの取り方や質問のポイントの突き方は実にうまかった。専門外のコメンテーターのご意見は参考になると思い、単語の羅列であるがメモはとっておいた。

Y氏が「地盤と建物には、相性があるって、ある周期の振動がくると大きく揺れる。阪神高速神戸線の神戸市東灘区深江本町の一本脚橋脚が折れて道路部分が将棋倒しになったが、折れ方がするどい。揺れ時間は非常に短かかったのではないか」との解説。「振動はまた、小さな丘や谷などの微地形や埋立地などの都市の立地条件に左右される」と説明。私は、この地震がなぜ起こったかを説明しなければならない。

地球を覆っている硬い岩盤すなわちプレートの境界に日本が位置していて、太平洋のプレートは日本列島が乗っているアジアプレートの下へ潜り込んでいる。そのプレートの境目では、列島の太平洋沿岸地域は下へ引きずり込まれて沈降して行くが、ある限界に達すると元へ戻ろうとする。そのとき大地震が発生するという話はほとんど男性のアナウンサー氏がやってくれた。そのようなプレートとプレートの境界の地震以外に今回のような、プレート内で発生する地震がある理由を述べた。

一口で云えば、プレート境界での押し合いの結果、プレートの内部にも力が加

わっているし、日本列島の地下には脆弱な部分が存在するので力が大きくなればそれに負けて地震が発生するのである。地震が何度も同じ所で発生すればそこには目立った傷として痕跡が残り、それが活断層として見えてくるのである。淡路島から神戸や大阪府北部にかけての地域は活断層の密集地帯である。今回の地震はそこで起きた。この説明で納得してもらおう。

また被害の話に戻る。大阪でガラスが壊れたビルがあった。ガラスが割れるにはその枠組みがしっかりしていないことが大きな原因である。これは 1983 年の日本海中部地震のときの教訓だった。首都圏の高層ビルはこのことを念頭に耐震性をもたせてあるはずとのこと。1994 年のノースリッジ地震ではガラスの被害は大きかった。今のところ神戸ではガラスの被害は顕著ではないようだ。

13 時 40 分現在の情報が入る。死者 436 名、不明 583 名、負傷者 884 名となった。犠牲者の数が急激に増えている。神戸市の東灘区や西宮市の被害が大きいようだ。神戸の生田神社の本殿が潰れたとのニュース。地下鉄は大丈夫なのか。シェルターのようにと云われている。

新幹線の様子報道される。高槻などで橋桁の損傷があり、名古屋と岡山の間が不通になっている。神戸市の火災は 71 件、建物の倒壊は 211 件だそうだ。

この時点でも、被害報告は断片的で、あとで分かったような広い地域での大災害という実感がまだない。コメンテータもどのような被害がありうるかを色々考えてみる。

「ブロック塀の倒壊は 1978 年宮城県沖地震のとき多数あり人的被害も大きかったが、今回はどうなのだろう。旧来の家屋では瓦の被害が考えられ、木造建築の筋交いがちゃんとしているのとそうでないのでは大きく違ってくる。今度の地震では多くの人々は就寝中で無防備の態勢であった。いざというとき逃げ出せるよう普段から考えておかなければならない」

このようなコメントを残して Y 氏は席を立たれた。この時、私たちには、多数の人たちがガレキの下で苦しんでおられたこと、あちこちで救出を待っている多くの人々がいたことを想像できなかった。警察では、救出活動優先で被害報告どころではなかったのである。

交代された次のコメンテータは保険に詳しい弁護士の H 氏である。今度は災害の補償の問題を取り上げる。自然災害では国が補償する制度はない。建物や家財に掛ける民間の地震保険制度があるくらいである。しかも補償限度額は総額で 1 兆円となっている。それ以上は補償しない。日弁連の調べでは地震保険に加入している人は全国で 7% であるが、東京が 16% なのに対し、近畿地方ではわずか 4% であった。これを見ても関西地区では地震に対する意識が低かったことがうかがえる。

14 時現在の被害状況では死者が 439 名となった。余震の回数は有感のもこれまでに 43 回。阪急伊丹駅ではプラットホームが 1 ~ 1.5 m 沈下し、下の交番がつぶされた模様。警察官 1 名は死亡、1 名はまだガレキに埋まった状態とのニュースが入る。

今回のような都市直下地震の例として、1948年の福井地震のことが紹介される。このときは、死者3,769人、倒壊家屋36,184棟のきわめて破壊性が強烈な地震であった。この地震後、気象庁の震度は、それまで6が最高値であったが、震度7という新たな等級を設定することになった。その地震から47年、その間、わが国では、このような直下大地震に襲われることがなく、太平をむさぼってきたのである。

アナウンサー氏は最近の地震活動、数年前からの北海道近辺の大地震の続発や今度の地震の起こり方から見て、日本列島全体で地震活動が活発になってきたのかどうかという質問をぶつけてくる。

個人的な意見という前置きで、歴史的に列島全体で活発な時期が何回もあり、今の状態もその傾向が見えてきたのではないかと述べた。放送時間の制約もあったが、このとき、実は1983年頃から近畿地方などで地震活動の活発化の兆しが見えていたのだという話はしなかった。10年前、神戸新聞の記事に「近畿にM七級」という見出しで、大地震が迫っているので注意を喚起する私のコメントが載ったことがある。その話は、この場面ではすることはできなかった。まだ、5千人を超える犠牲者が出るような大災害になろうとは推測できなかったにせよ何百人という命が奪われた地震災害の直後に、実はその危険の警鐘を鳴らしていたのだとは云えない。

また、今の研究体制や装備で地震の前もった正確な予測を行うのが無理であることを分かってもらえないと、数少ない資料に基づいて予測を行っていたといっても、何の慰めにもならない。

14時30分には死者530人、14時45分には594人、不明531人、負傷者933人となった。東京レスキュー隊がヘリコプターを出して救援に向かったそうだ。建物倒壊の件数は2,013となった。淡路島の北淡町の被害も大きいらしい。一宮町では10人が亡くなった。ほとんど家屋の倒壊の下敷になったようだ。

15時頃スタジオから降りた。番組後の立ち話で、そのアナウンサーK氏は、大学で地学を修めたセミプロであることがわかった。スタジオのテーブルの上にも何冊かの地震の資料が用意されていたことやインタビューのやり方が実に”科学的”であったなど感心した次第であった。

17時頃、今度は別のテレビ局のスタジオに入った。東京都立大学都市研究所のN氏と私と同じ研究所のT氏がすでに出演されていて、私は一番端の席に座った。

液状化が問題になっていて、ポートアイランドと比べ新しい六甲アイランドの被害は軽微のようであった。技術の差が出たのだろうか。

16時45分発表の被害状況。死者867人、不明569人、負傷者3,434人、建物の倒壊件数2,972。

火災現場が画面に映る。土ほこりがもうもうとしている。断水のせいだろうか。これでは消火ができない。江戸の火消しのような破壊消防に頼らざるをえなくな

っているようだ。ヘリコプターによる空中からの消火はできないのだろうか。消防関係者の話では、大きな危険を伴うのでできないとのこと。火災件数は神戸で106件に達した。今ごろになってなぜ火災が多発するのだろうか。

最近の日本では、「地震がきたらすぐ火を消す」習慣が定着していて、1993年2月の能登半島沖地震でも火災発生はわずか1件であった。今回は地震からかなり時間が経って発生した火災が多い。その原因を究明すべきだと私はコメントした。

地震屋のT氏と私には今度の地震の性質についての質問が飛ぶ。活断層とは何か、今回の地震の断層はどうなっているのか。T氏は、今回の地震が大まかに云って横ずれの断層が動いて起こしたということを示す解析データを持っていた。これは世界各地の観測点の地震波形をコンピュータネットワークで集め、解析したものである。

余震の分布が示す地下の地震断層と概ね一致している。南西から北東へ延びる断層の北側の岩盤が右、南側が左へ動いた。これはほぼ東西方向に地殻の圧縮力が働いたことを示す。

神戸市の東部や芦屋市、西宮市に倒壊家屋が多いのはどうしてかと質問がくる。私は地震断層のずれ運動が急激に止まった地点が西宮辺りにあるのではないかという意見を述べた。地震の断層は単純なものではなく、いくつかに別れ、それぞれがいわば別々の震源として10秒ぐらいの間に地震を次々に起こして行ったということが後から段々わかってくるのだが、この時点ではそんなことは分からないし、淡路島に地震断層が地表に出現していたこともまだ分かっていなかった。

地震後停電した世帯が90万戸であったが、夕方までには少し復旧し、停電世帯数は60万戸になった。新幹線も名古屋、京都間が開通し、不通区間は岡山と京都の間となった。

学校などの避難場所には被災者が集まっている。皆、ラジオの放送に耳を傾けている。

18時頃この番組から降り、一旦、研究所に戻った。

地震研究所ではその日の午後、今回の地震の調査の打ち合せやその情報連絡体制について協議する会議が開かれていた。地震予知研究推進センターが中心となって連絡にあたることになり、地震予知情報センターでは、さっそくコンピュータネットワークを使った情報交換の場を設定し、今度の地震に関する情報を電子メールで多くの研究者に伝えることができる体制ができた。

hyogo という名前のアドレスにメールを送ると、登録された研究者すべてに配送される。

電子メールによるホットな情報や過去の地震に関する資料を集め、都内のホテルで待機する。

深夜の放送

日が変わり、18日午前0時から夕方と同じスタジオに入る。朝5時までの長

丁場の番組である。アナウンサーは男性の Y 氏、女性の K 氏、コメンテータは私 1 人であった。

VTR が流れる。JR 長田駅付近の火災、阪神高速道路の倒壊現場。次にヘリコプターからの生中継が入る。長田区と兵庫区にまたがった地域、上沢通り付近の火災現場が映る。機上の記者は 200 m 上空からの様子を伝えてくる。

「キナくさい臭いと熱気を感じています。火災は南北に 300 m 東西に 1,000 m に広がっています。かれこれ 1, 2 時間燃えていることになります」

神戸西市民病院の損壊が大きく犠牲者がでている模様。

身元が判明した亡くなった方々の名簿が関西の系列局のスタジオから発表される。このとき 450 名。死亡が確認された人の数はすでに 1,590、不明 1,017、負傷者 6,334 となっていた。

0 時 51 分には神戸で震度 3 の余震があった。0 時 45 分発表の被害統計は、1,681 人死亡、1,017 人不明、6,334 人負傷であった。長田区で一度に 10 人が亡くなったというニュースが飛び込む。

災害の全体の規模がようやく見えてきた。関係者の話によると道路復旧は 2 年以上はかかるようだ。その爪痕はものすごい。芦屋市のマンション倒壊現場が映し出される。このマンションは各階 4 戸で 4 階建てである。1 階部分が潰れている。レスキュー隊がファイバースコープで崩壊した建物の柱や壁の間にできた隙間の中を窺いながら懸命に生存者の捜索を行っている。現場で声が飛ぶ。

「鉄骨を削らないとだめだ。壁をどかせ」 東灘区のマンションでも名古屋市消防局の救援隊が必死の救出活動を行っている。

企業活動はどうであったか。関西電力にインタビューがまわる。地震当日約半数が出勤し、連絡、復旧活動などに当たったということである。

1 時 50 分現在、被害は 1,709 人死亡、985 人不明、6,334 人負傷、倒壊 8,411 棟。犠牲者の数が 2 千人を越えそうな雲行きになった。負傷者の数が止まったままである。もう病院の治療ないし収容能力を越えたのか。犠牲者の名簿が発表される。550 名となった。救助のため自衛隊 1,000 人が被災現場に入っている。

もう 2 時半をまわった。西宮市では 1 万 8,500 人が避難しているとのこと。高速道路や鉄道の橋桁の倒壊が報告される。大阪ガスでは都市ガスの供給を 38 万 4 千戸でストップしているようだ。NTT 関西支社では重要な回線が発着信不能にならないよう衛星無線車を出して対応している。

2 時 45 分、1,712 人死亡、988 人不明となる。負傷者や倒壊件数は不変。各地方自治体の対応の様子が取材される。西宮市災害対策本部では、「どこから手をつければよいかわからない」という状態。3 万 5 千食の食料を手配した。崖崩れの報告。芦屋市水道局では、「阪神水道企業体からの水が来ない。浄水場との連絡もとれない。給水車を県や大阪市、自衛隊に要請した」と言っている。宝塚市では、高台で水道が出なくなっている。

3 時 45 分、1,764 人死亡、不明 966 人、倒壊 9,111 棟、負傷者数は変わらず。

地震の解説も時々挟んでいったが、悲報や被害の実態報告に圧倒されて、まと

もな説明ができない。どのようなことをしゃべったか、記憶も曖昧である。活断層や余震のことを話したことは覚えている。最大の余震の規模(マグニチュード)は本震より1小さい程度で、これがいつ発生するかは予測できないが、1か月後に発生する場合もあるなどと言ったつもりである。

4時30分ごろ、兵庫ネットワークビル鉄塔倒壊の恐れがあるので、半径200m以内の住民に避難勧告が出た旨、放送された。

5時に近づき長い放送から解放されることになった。

長時間の現場中継でも、被災地の映像はそれぞれ視界が限られていて、破壊された家屋などがどのように分布しているのか、救助活動がどの程度進行しているのか、ほかにどんなタイプの被害が発生しているのか、それがまだよく分からなかった。

急傾斜地が多い神戸で、崖崩れや土砂崩れのニュースはほとんど入ってこなかったが、本当はないのだろうかと疑問に思った。あとで、西宮市の仁川で大きな土砂くずれがあったことがわかった。

地震発生直後、テレビ局に飛び込んでくるニュースの中から疑問ないし不思議に思った震災に関する謎のいくつかは、

(1) 我々は被害の状況の把握がなぜこんなに遅れたのか、

(2) 被害がひどいのに、なぜあれだけ自動車が道路を走っているのか、

(3) 阪神高速道路神戸線の東灘区深江本町の部分はどんな揺れ方をして横倒し状態になったのか、

(4) 地震後だいぶ経ってからあれほどの火災が頻発したのはなぜか、ということであった。

(1) については、情報伝達の問題もあろうが、我々の認識の甘さも指摘できる。私もまさかと思っていた。これまで、例えば東京で震度6があっても全く被害がでないなど、現代日本の都市の耐震性にはある程度の信頼性があった。

1994年末の三陸はるか沖地震の八戸市での震度6でもいくつかの建物は損壊したが、それほど深刻な状況はなかった。慣れの恐ろしさである。震度7を越す地震が有り得ることは地震学者なら知っているのだが、それでも災害の規模の的確な予測は難しかった。

(2) は不可解なことである。火災現場の近くも平気で車が走っていく。この疑問については現地の状況や人の心理の状態がどうであったかが解くカギになるう。

(3) に関しては、つぎの節で紹介する証言が如実に物語ってくれる。後の聞き込み調査中、電話連絡を受けて聞いた話である。

(4) の火災発生の原因の有力なものとして電気の通電の際の漏電が考えられている。ガスの供給ストップが地震後六時間以上経ってから実施されたことも原因かもしれない。これだけの災害でガスタンクの爆発がなかったのは幸いであった。こちらの耐震性は優れているのかもしれない。ガソリンスタンドの地下タンクの損傷の報告もないとのことである。

阪神高速道路神戸線の横倒し

阪神高速神戸線を乗用車で走行中、地震に遭い、びよう風倒しの倒壊現場から奇跡的に助かった奈良県在住の さんの証言（電話）を紹介しよう。

「17日早朝、出張のため西へ向かって走行中、神戸市東灘区深江本町にさしかかったとき、前方右側（神戸三宮方面）に地面を走るような筋状の光が見えました。3回くらいパッパッと点滅し、色は緑に近い色でした。それから3～4秒してから、身体に揺れを感じました。この揺れの直前に海側のやや高い位置に、すりガラスをとおして見たような、ボーとした赤い光を見ました」

地鳴りはありませんでしたかの質問に、「ゆれの直前かどうかはつきりしませんが、ゴーという地鳴りは聞こえました」と、自動車の中からも地鳴りが聞こえていたこと、しかし、それは大きなゆれが来てからで、その前は気づかなかったことを証言した。

高架橋がどのように倒れていったかをぜひ知りたいのですと懇願して、その状況を話してもらった。

「高速道路がヘビのように横にくねくねとゆれました。数秒の周期だったと思います。前輪と後輪がねじれるようでした。車は横へスリップします。10秒ぐらいしてから、こんどは縦に振動しはじめました。”く”の字のような形です。周期は1秒ぐらいでしょうか。高速道路の継ぎ目も上に行ったり、下へ行ったりしたんですよ。これにはびっくりしました。80kmぐらいのスピードで走っているのですが、止まったら追突されますから、必死でハンドルをとっていました。自分の車は中央分離帯を越え、対向車線に飛び出してしまいました。もう少しで600mの長さを走り切るところでした。高速道路は倒れ、歩道橋のそばに落ちました。道路は中央部分から崩れたのだと思います」

車ごと投げ飛ばされたが、軽傷で済んだ。「気絶していたようです。携帯電話のベルで起こされました。妻が心配して地震後すぐ電話したのだそうです。電話がつながるのに30秒くらいかかったようだから、気絶していた時間が短かければ、橋ゲタが落下するまでに30秒くらいかかったのではないのでしょうか」

「辺りは真っ暗で、落ちたところがすぐ下の道路と同じ高さにあるとは思いませんでした。地面に降り、前を見ると、橋が崩れたのに、ビルがどうもなく立っている。それが、非常に変に思えました」

現地調査の準備

自宅に帰ったのは6時半ごろ、夜が明け始めていた。朝食をとって、研究所に出勤する。いよいよ地震調査の準備に取り掛からねばならない。

18日は、調査に行くための資料を集め、整理する。その間、被害の規模はどんどん拡大し、10時45分発表では、亡くなった人の数は2,679人となった。

現地の情報を得ようとして電話をかけてみる。京都や和歌山でも、「ただいま、電話がかかりにくくなっています。しばらくしてからおかけ直してください」というアナウンスばかりで、一向につながらない。

一方、地震研究所の他のグループは次々に調査に出かけていった。17日のうちに、震源地付近での余震観測実施のため、淡路島へ向け和歌山地震観測所の職員が出動したのをはじめ、今度の地震で断層が地表に現れたかどうかを調査するグループがこれも淡路島へ向かって東京を出発した。

18日には、人工衛星を使った地殻変動観測を行うグループ、震源近傍での強震動を観測するグループ、地変や被害の調査を目的とした研究員が神戸方面へ向かった。

19日、かかりにくい電話が京都の義弟にやっと通じた。

地震の被害はさらに大きくなり、亡くなった人は19日11時45分の段階で3,109人となり、ついに3千人を超え、さらに、その日のうちに4千人の数も突破してしまった。今度の地震と同じ都市直下地震である1948年福井地震のときの犠牲者の数3,769人を超える戦後最悪の震災となってしまった。

.....

おわり